

機関番号：16401

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19202021

研究課題名（和文） 日本・中国・台湾の研究者による中国民衆運動の史実集積と動態分析

研究課題名（英文） Compiling and Analysis of the records of local revolts in Chinese history by researchers in Japan, China and Taiwan

研究代表者

吉尾 寛 (YOSHIO HIROSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：40158390

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本・中国・台湾の三世代にわたる20数名による共同研究であり、文献調査・実地調査に基礎を置き、帝政期の全体をとって、一つの地域社会（府・州・県、函・都・里・甲等）に残る民衆運動の情報を網羅的に集積した。この分析をもとに、中国史の特質に関わって、民衆運動が多発する特定地区、省境に代表される“境界”が王朝交替に果たす役割、水運従事者等の非農業民を含む“民衆”の多様な内実、および今後期待される実地調査の意義（過去の諸情報が伝承されてきた過程の検証）等を提示した。

研究成果の概要（英文）：

This study was collaborated with above twenty researchers over three generations who began studying about Chinese local revolts, and the main works were the exhaustive compiling and analysis of the records of revolts through the imperial period which broke out in local society such as *fu*, *zhou*, *xian*, *tu*, *du*, *li*, *jia* etc.. Through this research, we presented several historical characteristics of local revolts concerned with the particularity of Chinese history: some specific regions where revolts broke out recurrently; the borderlands playing the independent role in the process of changing dynasties; various classes of people such as those engaged in water transportation; the method of fieldwork expected in the future for investigating the process of handing down the stories about local revolts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
2008年度	8,700,000	2,610,000	11,310,000
2009年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総計	27,400,000	8,220,000	35,620,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東洋史、中国、台湾、民衆運動、地方史実

1. 研究開始当初の背景

- (1) 【着想の起点：第一世代の中国民衆運動史研究：1970年代後半-80年代前半】
1978-83年にかけて発刊された谷川道雄・森正夫共編『中国民衆叛乱史』（平

凡社・東洋文庫）は、秦末の陳勝・呉広の乱から清朝の嘉慶・白蓮教徒の乱、又18世紀の抗租等にいたる80数件の「叛乱」の史実を我が国で始めて日本語訳したものである。各「叛乱」に関して付さ

れた年表の事項数は月単位で数えると総計 820 をこえる。

本研究は、この日本の中国民衆運動史研究・第 1 世代の代表成果を、今日の視点と方法とによって批判的に継承するところに基本的狙いがある。

『中国民衆叛乱史』は、前近代の民衆運動が中国前近代社会の解明の重要な要件であるという認識のもとに、①国家（・専制権力）をうみだす主体のあり方、②不断の階級闘争（民変・奴変・抗租）、③運動集団内部の人的結合関係、④民衆の内面世界（宗教をはじめ民衆的次元におけるさまざま意識形態）について留意された。ただし、完成度の高いこの研究は、逆に、多くの研究者の関心を運動自体から運動の契機・背景に向かわせた。研究全体の分散化とも相俟って、中国民衆運動史を直接扱う論稿は徐々に減少していった。

- (2) 【第二世代、第三世代：個別実証的著作の刊行と研究環境の国際化：1990 年代半ば～現在】90 年代半に入ると、第一世代に学んで研究活動を開始した研究者（第二世代：本研究の代表者・分担者の大半）が、民衆運動に関する個別実証的論稿を著作としてまとめ、又民衆運動の契機に関わる研究を著書として公表した。これらの著作によって、研究者の眼はより強く民衆の生活の場としての地域社会に注がれ、そこで①移住民、②社会秩序、③民間信仰、④法的規範、⑤宗族、⑥民族間対立、等の問題が中国史研究の中で改めてクローズアップされた。最近では民衆運動史の論文を発表する第三世代（甘利弘樹等）も登場する。他方、“民衆”をとらえる視野を海域まで広げる必要性を喚起する著作も登場した。

他方、研究環境の国際化、特に個々の研究者・研究機関レベルの日本・中国・台湾の研究交流が深まり、それによって、史料的制約から華北の地方的民衆運動について未着手の部分が多かった日本の研究は、この課題の解決のための道を開く契機を得た。

- (3) 【中国・台湾における民衆運動史研究】中国では建国以来凡そ 1980 年代まで、中国民衆運動史は学界を代表する研究として進められた。史料集に関しても、通史的編纂、地域別編纂など、今日でも高い評価を得ているものがある（『農民戦争史料彙編（秦漢～元代）』、『清代台湾農民起義史料選編』等）。また、顧誠著『明末農民戦争史』（1984）のような体系性をそなえた実証的著作も発刊された。

だが、その後、民衆運動史の専論の発

表数は、所謂改革開放政策の展開の中で急減し、92 年には「中国農民戦争史研究会」が無期限休止、代表的学術雑誌『中国農民戦争史論叢』等も次々と閉刊した。マルクス主義歴史学ないし階級闘争史観から脱却して中国史独自の歴史過程が追求されつつある今日の中国では、民衆運動史研究は他分野の研究の一部に資するに止まっている。

台湾における民衆運動史研究は、漢族の移住、清末・日本の植民地統治下の民族抗争史について業績を有し、他方、近年、若手研究者（唐立宗等）の中に日本の第二世代の研究成果を吸収し著作を発表する動きがあるが、民間史料や档案にもとづく当該研究のまとまった量の公表は見るにいたっていない。

2. 研究の目的

本研究は、過去中国民衆運動史研究に関わった日本の三世代にわたる研究者、加えて、それに準じる中国・台湾における研究者が参集し、それぞれの研究業績をふまえて、以下の課題にあたる。

- (1) 秦末～清末にかけての中国民衆運動の史実を文献調査、実地調査によって網羅的に集積する。つまり、日・中・台の研究の中で、中国民衆運動の史実はどれほどまで掌握できているか、この基本問題に見通しをもつ。
- (2) 以上の方法によって、中国史上におこった民衆運動の基層社会における史実、約 1,500 件を集積する。本研究は、その通時的検討をもとに、民衆運動の歴史的動態のもつ特質の一端を実証的に明らかにするとともに、今後共有できる分析視点を新たに見出すことを試みる。
- (3) さらに、運動地点の実地調査の成果にもとづいて、①過去の関連する諸情報が現在までその地域社会にどのように伝えられているのか、②事実と伝承が現在の農民の生活等にいかなる影響を及ぼしているかを考察する。

3. 研究の方法

- (1) 史実を集積する民衆運動あるいは地方暴動は、『中国民衆叛乱史』の成果をふまえて以下を対象とした：陳勝・呉広の乱、緑林・赤眉の乱、黄巾の乱・五斗米道教国、孫恩・盧循の乱、大乘教の乱、隋末唐初の諸叛乱、裘甫の乱、龐勳の乱、黄巢の乱（以上は正史の記事を中心）。宋代以降については、零細な史料が多いため、本科研のメンバーの業績に照らして、以下を選定した：方臘の乱、王小波・李順の乱、元末の紅巾の乱、明代河南の土賊、福建・江西省の民変、広東・福建・

江西・湖南等の山寇等、李自成の乱、奴変、江浙地区の搶米・民変・抗租、広東・広西省の少数民族等の反乱、太平天国および同時期の西南の少数民族反乱、魯西白蓮教反乱、山東・河北・安徽の義和団運動、民国期の秘密結社および台湾等の海賊。

- (2) 史実は、一つの地域社会（府・州・県、より基層に近い図・都・里・甲等）に残る民衆運動あるいは地方暴動に関するものと定めた。その情報は、テキストとともに、史跡等に関する画像を以て構成されるものとし、それらを一つのデータベースに集積することとした。

①データベース（以下 DB と略称）は、吉尾が市販のアプリケーションソフト（FileMaker）をベースに設計し（「中国民衆運動史実」）、インターネットを介して国内・外の研究分担・協力が高知大学のサーバー機に WEB 入力できるようにした。

②国内の研究分担者・協力者はもちろん、海外の研究協力者に対しても、代表者吉尾が自作マニュアルを持参して個々に訪問し、入力方法を説明した。

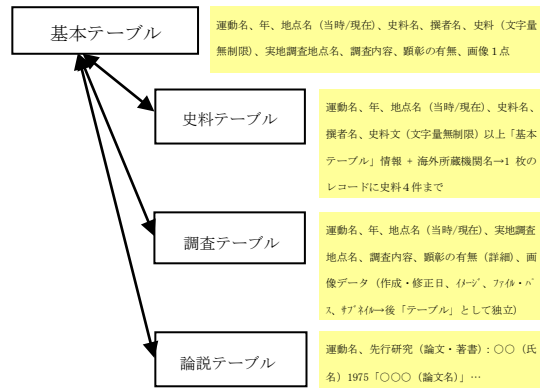
③唐代以前のテキストデータについては、正史が主となるため、龍谷大学の研究分担者・都築晶子を中心とするチームにより一括入力することにした。

④画像データは、各民衆運動の発生地点あるいは主要な活動拠点等の情報に重点を置き、基層社会に立ち入って収集する。かかる組織的仕事は、日本の学界では殆ど例を見ないものである。唐代以前については、できる限り広域的に調査する一方、宋代以降、とくに明清時代については、学界を代表する民衆運動の基層社会のあり方に関わる先行研究をふまえて選定する。もとより、一つ地域について異なる時代の当該情報は、DB 等を介して互いに共有できる形をとる。

⑤画像データは、DB のシステム上の理由により、時代を問わず、高知大学のサーバー機から直接入力することにした。

4. 研究成果

- (1) 現在高知大学・総合研究センターの当該研究室には、DB「中国民衆運動史実」を構成するサーバー機が設置されている。DB の基本骨格は「基本テーブル」（トップ画面）を中心に、「史料テーブル」、「調査テーブル」、「論説テーブル」から成り、相互に連動する。10 年度からは実地調査の進展にともない想定以上に画像データが増え、それに対応すべく「画像テーブル」を新設した。以後、国内・外の研究分担者・協力者は、Internet Explorer



等を利用して入力し、その総数は、当初の予定 1,500 件をはるかに越え、10 年 2 月の時点でテキストデータ約 15,000 件（文字数で約 900,000）に及ぶ。とくに、唐代以前の入力は 12,800 件近くあり、中国（南開大学・河南大学）・台湾（国立暨南国際大学）の協力者からも 1,000 件を超える入力があった。ただし、吉尾のもとにはなお未入力の 5 万字ほどテキストデータ、約 7,500 件の画像データがある。吉尾の 08 年の入院加療による作業の遅れに由来する。今後は、各分担者・協力者の所属機関単位で形成された個々の DB に対してリレーションを設定した上位の DB を準備し、セキュリティの問題を解決した上、新規 DB として公開に踏み切りたい。この間を補う意味で、画像データの約半数は、2011 年秋出版（東京・汲古書院）する本科研論文集に DVD の形で収録する予定である（後述）。

- (2) 唐代以前の担当者は文字データの入力に見通しをつけた 2008 年度から関係史跡の調査を本格的に開始した。その結果、武漢大学、南京師範大学等の協力を得て、山東南部、安徽北部、江蘇、浙江北部、河南南部、湖北北部、陝西南部にかけて、民衆運動史跡に特化し都市、農村における約 40 地点を踏査し、画像データを収めた。この成果の一部は、葭森健介編著『唐代以前中間報告』（5. [図書] -⑦）において既に公表している。

宋代以降については、唐代以前の調査の成果・方法を受けて、分担ごとに 2009 年度以降順次現地調査を開始した。研究協力者の所属する南開大学、河南大学、安徽大学、さらには厦門大学、山東大学等の協力を得て、明末清初の黄通の乱、清代河南の堡寨、白蓮教徒の乱、広東の少数民族の乱、義和団等の史跡、およびそれに関係する地方档案・鎮志・族譜等の地方文書等について調査した。殊に、黄通の乱に関する福建省寧化県における実地調査は、本科研の顧問森正夫氏が

団長として09-10年度2度にわたって行われた。収集された文書は、森正夫氏編・資料集(A4判・36頁)、稲田清一の論文(5. [雑誌論文]-②)等にすでに公表している。

- (3) 上記のテキストデータ、画像データが研究分担者・協力者等の中で順次共有されていく中で、公開討論会、報告会を3回開催した。

①ミニシンポ「中国史上の民衆運動の再考察」(2008年11月23-24日 徳島大学総合科学部・しんくら会館 四国の4大華東師範大・武漢大・南開大の研究者が報告・発言): 運動の主体は時代によって異なる—全て民衆とはいえないこと、文革後の世代に民衆運動に関心をもつ者は少ないが、現在の問題でもあることは無視できないこと、また民衆運動における秩序構築の側面も検討する必要性がある等の意見が出された。

②公開中間報告会「中国民衆反乱史の地域と景観」(2009年12月19-20日 高知大学総合研究棟): 地方史実の収集と並行して進められた史跡情報、景観の掌握の成果を発表した。即ち「唐代以前班中国調査中間報告」、「北宋・方臘の乱の史跡について」、「明末清初の黄通の乱と寧化県」、「福建省漳州市平和県の客家土楼をめぐって」、「清末南西地方の少数民族の反乱をめぐって」、「河北・山東・安徽省交界地域の義和団、白蓮教徒の乱をめぐって」、「清代河南省の堡寨」、「崇禎崇禎常州宜興縣奴變與祁彪佳(蘇松巡按)《宜焚全稿》」である。

他方、「六朝江南の宗教運動」、「太平天国における不寛容」、「中国史における賊と民と国家の関係をめぐって」なる報告を行った上で、民衆運動と中国史の展開の関係についての最初のまとまった意見交換を行なった。とくに、民衆運動が発生する基層社会の「景観」をめぐって、原住民と移住民、漢族と少数民族、さらには宗教間の対立と交流に関わる「境界」と見なしうるものが見出されること、その「ランドマーク」に相当するものが碑刻、祠堂(族譜)、ならびに自衛用構築物としての様々な「寨」であること、さらには、運動の指導者・築造者の末裔等から当時の情報を直接聞き取ることは可能であり、今後この分野でフィールドワークは重要な方法になるとの認識を共有できた。

③中国史・国際シンポジウム「日本・中国・台湾の研究者による中国民衆運動の史実集積と動態分析」(2010年11月27-28日 龍谷大学清和館): それまでの考察をふまえて、「これからの中国民衆

反乱史研究を切り開く課題と視点」を確認すべく、3つの論点、1) 通史的観点から見出される「反乱が頻発する地区」、2) 民衆反乱史研究における新たな研究手法、3) 反乱が発生する基層社会のあり方とそれが中国史の展開に果たした役割、をたてて報告・討議を行った。

1) については、4つの地区—河北・山東・河南・安徽・江蘇の四省交界地区(陳勝・呉広の乱、劉六・劉七の乱、徐鴻儒の乱、義和団等)、「江南」地区(江蘇省の長江下流デルタ～浙江地方)(方臘の乱、搶米、民変、抗租等)、福建・江西省交界地区(六朝の水上交通者、明清の山寇等)、広東・広西省交界地区(少数民族反乱)福建省の沿岸地区ならびに台湾海峡(「海寇」)である。

2) については、黄通の乱に関する在地諸層の伝承過程の確認とそれに関わる族譜等の史料の保持—これらの調査の意義と可能性、一方、事件の処理過程に即して当事者・当局の秩序意識を確認できる刑科題本等档案史料の価値が報告された。

3) については、以下のような中国史全体の特質にふれる民衆運動に関する見解が明らかにされた: 中国史は「文人官僚倫理」対「戦士武人倫理」の対抗関係の展開ととらえることができ、宋代以降官僚制の政治的合理化・全面化は、「戦士武人のエートス」を在野世界に追放した、春秋時代の戦士武人から、游侠、任侠、無頼、悪少年、博徒、巫術者へ、水滸伝、白蓮教、義和団的民衆文化が特異に発展をとげる、ただし、中国の国家社会文化、さらには民衆世界のグランドデザインは、春秋戦国から秦漢帝国までにほぼ確定され、以後、様々なバリエーションを生んだものの、基本的骨格はアヘン戦争まで変化しなかった/ 唐代以前の民衆反乱は国家と基層社会との矛盾で起こる反乱(国家に対する民間の反体制運動)が主であり、基層社会の内部の矛盾に端を発する反乱は移民問題などに絡むものに限られる/ 貧困(流動性)と暴力、交界性(アジール性) = 治安行政権力の空白空間、宗教・武術を介した社会的結合、これらが家産制国家と易姓革命論の「幻視」= 主観性と結びついたところに周期的に繰り返される「宗教的」民衆反乱/ 地域社会が宗族の家屋、祠廟・学宮に象徴される漢族の文明に包摂される中でなお存在する非漢族の文化を見出す意義/ 1930年代の地籍図に「一田両主」制等の遍在が認められない以上、「江南」に「封建」があったといえるのであろうか/ 「士人」と「土豪」

は各々独自に地域社会を指導する存在（県城、城外の「郷」等を場）であり、彼らの活動を通して、地域社会の多層的、重層的なあり方が認められること／日本の「義民」研究にみられる「先例や特権の維持を目的とした」顕彰・伝承の掘り起こし作業を行い、「民衆的伝統の継承」方法を追究すること／基層社会の反乱の一群の史実をふまえて中国農民の現実の課題（土地収用問題）の解決に迫ることが必要ある／等々。

- (4) 以上、本研究は、『中国民衆叛乱史』の業績をふまえつつも、史実の電算化（テキスト・画像）とその掌握量、方法の新しさ（国際共同研究、フィールドワーク）において、『中国民衆叛乱史』とは異なる実績を表すことができたと考える。

研究期間内に、分担者のお一人であった北海道大学文学研究科・津田芳郎教授の急逝という悲しみに遭った。にもかかわらず、上述の成果ならびにそれに関する多数の論著を公表できたことは、各メンバーのテーマに対する真摯で科学的な取り組みによるものに他ならない。津田教授がご健在であれば、実証、理論両面においてさらに別の成果を生むことができたであろう。

本科研の成果を広く明らかにするため、本研究に参加した日本・中国・台湾の研究者による論文、および実地調査で収集した画像データ（約半数）を収録したDVDからなる図書を、2011年秋季・汲古書院より、高知大学運営費交付金の補助を受けて発行する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 33 件）

- ①柴田昇「陳勝論ノート—陳勝吳広の乱をめぐる集団・地域・史料—」、名古屋大学東洋史研究報告、35、pp. 97-114、2011、査読有
- ②稲田清一、「福建省寧化県档案馆所蔵資料紹介」、甲南大學紀要・文学編、161、pp. 261-275 2011、査読無
- ③松浦章「『甬報』に見る浙江沿海の海盜」、或問（近代東西言語文化接触研究会）、19、白帝社、pp. 1-9、2010、査読有
- ④菊池秀明「太平天国における不寛容」、『岩波講座 東アジア近現代通史』1、東アジア世界の近代・19世紀、岩波書店、pp. 300-317、2010、査読有
- ⑤井上徹「明朝的対外政策と両広社会」、復旦大学文史研究院、『都市繁華—一千五百年来的東亜城市生活史』中華書局、pp. 139-169、2010、査読有
- ⑥佐藤公彦「帝国主義中国分割と「民衆」社

会』、『東アジア近現代通史』2、岩波書店、pp. 176-195、2010、査読有

- ⑦甘利弘樹「明代広東・福建・江西交界地域における山寇の活発化について」、大分大学教育福祉科学部研究紀要、32-1、pp. 31-44、2010、査読無

⑧菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」、国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』、36、pp. 63-90、2010、査読無

⑨稲田清一「福建省寧化県「黄通の乱」関係史跡・史料調査記録」、甲南大學紀要・文学編、160、pp. 281-291、2010、査読無

⑩山田賢「民族主義」の記憶と「秘密結社」、『東アジアの政治文化と近代』、有志舎、pp. 38-57、2009、査読有

⑪吉尾寛「浅析捻軍・苗練占領圩寨の戦略意図」、淮河文化縦論、中国合肥工業大学出版社、pp. 205-217、2008、査読有

⑫戸田裕司「唐仲友案の現実と評価—兼論『清明集』所描写的地方政治—」、法制史研究（台湾）、14、pp. 49-67、2008、査読有

⑬葎森健介「回顧近代日本の魏晋南北朝文化史研究」、『中国魏晋南北朝史国際学術研討暨中国魏晋南北朝史学会第9届年会論文集』、pp. 13-17、2007、査読有

⑭佐藤智水「河北省涿県の北魏造像と邑義（前編）」、佛教史研究、43、1-47、2007、査読有

⑮甘利弘樹「明代広東における反乱の諸相」、『山根幸夫教授追悼記念論叢 明代中国の歴史的位相』、汲古書院、pp. 549-569、2007、査読無

⑯佐藤公彦「近代中国におけるキリスト教布教と地域社会—その受容と太平天国」、歴史評論、690、pp. 56-70、2007、査読有

〔学会発表〕（計 25 件）

- ①井上徹「「華」はどのように「夷」を包摂したか?」、歴史科学協議会第44回大会、2010年11月21日、名古屋・中京大学
- ②吉尾寛「民衆反乱の視点—明清時代を中心に—」、「2010第8回日中共同学術討論会・世界史としての中国史」（河合文化教育研究所・龍谷大学文学研究科東洋史学専攻・北京大学歴史系共催）、2010年8月23日、京都・龍谷大学
- ③三木聰「抗租 再び—27年後の展望」、(基調報告)、「明清史夏合宿2007」、2007年7月29日、北海道・むかわ町

〔図書〕（計 13 件）

- ①堀地明、汲古書院、(単著)『明清食糧騷擾研究』、2011、刊行予定(印刷中)
- ②伊藤宏明、私家版、(単著)『唐五代民衆叛乱史関係研究文献目録(増訂版)』、2011
- ③佐藤公彦、汲古書院、(単著)『清末のキリ

スト教と国際関係』、2010、550

④菊池秀明、岩波書店、(共著)『新編 原典中国近代思想史』1、開国と社会変容—清朝体制・太平天国・反キリスト教、2010、全363頁内、pp.3-7、13-20、135-143、215-244、296-298、348-355

⑤菊池秀明、汲古書院、(単著)『清代中国南部の社会変容と太平天国』、2009、344

⑥松浦章、上海辞書出版社、(単著)『清代帆船東亜航運与中国海商海盜研究』、2009、337

⑦葭森健介(共著)「日本・中国・台湾の研究者による中国民衆運動の史実集積と動態分析・唐代以前中間報告」書、本科研、2009、全51頁内、pp.11-22、36-38、51

⑧松浦章、榕樹書林、(単著)『東アジア海域の海賊と琉球』、2008、337

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉尾 寛 (YOSHIO HIROSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：40158390

(2) 研究分担者

葭森 健介 (YOSHIMORI KENSUKE)

徳島大学・総合科学部・教授

研究者番号：50191648

柴田 昇 (SHIBATA NOBORU)

愛知江南短期大学・教養学科・准教授

研究者番号：60352887

都築 晶子 (TSUJUKI AKIKO)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：00115601

佐藤 智水 (SATO CHISUI)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：40116463

伊藤 宏明 (ITO HIROAKI)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：60135275

津田 芳郎 (TSUDA YOSHIRO)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：30091474

(H19→H20)

戸田 裕司 (TODA YUJI)

静岡福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：10242794

堀地 明 (HORICHI AKIRA)

北九州市立大学・外国語学部・教授

研究者番号：70336949

稲田 清一 (INADA SEIICHI)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：60221777

三木 聡 (MIKI SATOSHI)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：90165986

甘利 弘樹 (AMARI HIROKI)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：90398256

井上 徹 (INOUE TOORU)

大阪市立大学・文学研究科・教授

研究者番号：20213168

菊池 秀明 (KIKUCHI HIDEAKI)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：20257588

佐藤 公彦 (SATO KIMIHIKO)

東京外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10178717

山田 賢 (YAMADA MASARU)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90230482

松浦 章 (MATSUURA AKIRA)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：70121895

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

(国内)

小林 一美 (KOBAYASHI KAZUMI)

神奈川大学・名誉教授

東 晋次 (HIGASHI SHINJI)

三重大学・名誉教授

渡 昌弘 (WATARI MASAHIRO)

人間環境大学・人間環境学部・准教授

榎本 あゆち (ENOMOTO AYUCHI)

東海大学・文学部・非常勤講師

北村 一仁 (KITAMURA KAZUHITO)

龍谷大学・文学部・研究員

(海外)

李 小林 (LI XIAOLIN)

南開大学・歴史学院・教授

牛 建強 (NIU JIANQIANG)

河南大学・黄河文明与可持續發展研究中心・副主任

卞 鳳奎 (BIAN FENGKUI)

国立台湾海洋大学・海洋文化研究所・助理教授

唐 立宗 (TANG LIZONG)

国立暨南国際大学・歴史学系・助理教授
(顧問)

森 正夫 (MORI MASAO)

名古屋大学・名誉教授

濱島 敦俊 (HAMASHIMA ATSUTOSHI)

国立暨南国際大学・歴史学系・教授

南 炳文 (NAN BINGWEN)

南開大学・歴史研究所・所長